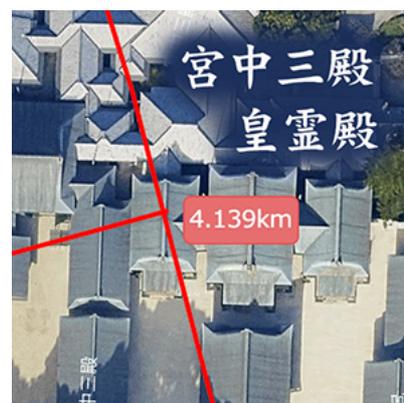


東郷神社



■ 靖国神社 ←← 4.139km ←← 東郷神社 →→ 4.139km →→ 宮中三殿 皇靈殿

■ 東郷神社

東郷平八郎が昭和9年(1934年)5月30日に亡くなると、全国から海軍省に東郷を顕彰する神社の創建の要望と献金が相次いだ。当時の海軍大臣大角岑生が財団法人東郷元帥記念会を設立し、寄せられた献金によって神社の創建が計画された。昭和12年(1937年)9月に地鎮祭、昭和15年(1940年)5月27日(海軍記念日)に御鎮座祭が行なわれ、同時に府社に列格した。昭和20年(1945年)には別格官幣社への昇格がほぼ決まりかけていたが、東京大空襲によって社殿が焼失し、昇格は断念された。戦後になって復興の機運が高まり、昭和33年(1958年)に奉賛会が結成され、昭和39年(1964年)に社殿が完成した。平成元年(1989年)2月3日には東郷神社爆破事件が起きている。



天神地祇八百万神が奉斎されている御殿で、明治5年3月に神祇省の廃止と共に宮中に遷座したのがその始まりで、三殿の中では最も後に成立しました。前項で記しましたように、明治2年6月、明治天皇は国是の確立を、天照大御神はじめ天神地祇八百万神と、神武天皇から孝明天皇に至るまでの歴代天皇の皇霊に御奉告のため、神祇官に霊代を設け招き祭らしめられ、御拝されました。そして同年、神祇官に神殿を設ける事が決まり、同年12月に仮神殿が竣工し、その中央の座に八神を、東の座に天神地祇を、西の座に歴代天皇の皇霊がそれぞれ奉斎され、鎮座祭が斎行されました。

明治4年8月、神祇官が廃され神祇省が置かれ、それに伴い神祇省に継承された神殿（西の座）に奉斎されていた歴代天皇の皇霊は宮中賢所に奉遷されましたが、八神と天神地祇は引き続き神祇省の神殿にお祀りされました。しかし、翌5年に神祇省が廃止され新たに教部省が置かれる事になり、そのため同年3月、神祇省神殿に奉斎されていた八神と天神地祇を宮中に遷し仮に賢所拝殿に奉安せしめ給う旨仰せ出され、それを受けて同年4月、神祇省の神殿に奉斎されていた八神と天神地祇、及び京都の神祇伯白川家、神楽岡の吉田家斎場、有栖川宮家の旧邸と新邸にそれぞれ鎮座されていた八神を、御羽車に移し、賢所拝殿に奉遷しました。翌5年、八神と天神地祇の両座を合祀して一座とし、「神殿」と改称され、これによって現在の宮中三殿の原型が成立しました。

東京都千代田区千代田1-1

現在の宮中祭祀の概要

皇室の祭祀は、多くが皇居吹上御苑の御所に近い「宮中三殿」において営まれます。その内容は天皇や皇室のための私的な祈願ではなく、国家・国民全体のため（さらには世界・人類のため）に祈りを捧げられるものです。

宮中三殿とは、中央に（イ）皇祖神の天照大神を祀る「賢所かしこどころ」、その西に（ロ）歴代天皇・皇族を祀る「皇霊殿」、その東に（ハ）全国の天神・地祇を祀る「神殿」を指しますが、（ロ）より西側の（ニ）新嘗祭のみに使われる「神嘉殿」も含まれます。

ここで行われる宮中祭祀の基本的な形体は、明治41年（1908）公布の「皇室祭祀令」に定められています。それは古代以来の神道祭祀をベースにしながら、近代的な国家的祭儀を織り込んだもので、詳細な「付式」（実施細則＝マニュアル）まであります。

そのため、これは他の皇室令と一緒に、戦後（昭和22年5月）廃止されましたが、宮内庁の文書課長から、「新规定ができるまで、従前の例に準じて事務を処理する」との依命通牒が出されており、その後も宮中祭祀の準拠とされてきました。

宮中の祭祀は、大祭と小祭と他の行事に分けられます。まず大祭では、天皇が自ら祭主となって殿内（内陣）で御告文（祭文）を奏上されます。それに対して、小祭では掌典長（内廷職員）が祝詞を奏上し、天皇が内陣で拝礼されます。さらに、毎年3度の旬祭と毎朝御代拝があります。その他の行事というのは、大祭・小祭のような神饌（お供え）や御告文・祝詞のない、小祭に準ずる祭事です。（以下、略称 [大] [小] [行]）。

それを内容的に三分しますと、（一）年始・毎旬毎朝の拝礼、（二）自然神などに祈る祭祀、（三）祖先神などに祈る祭祀となり、各々次のような例があります。

（一）

正月の①四方拝 [行]、②歳旦祭 [小]、③元始祭 [大]、および毎月三旬の④旬祭と毎日早朝の⑤毎朝御代拝

（二）

2月の⑥祈年祭 [大]、10月の⑦神嘗祭 [大]、11月の⑧新嘗祭および6月と12月の⑨節折よおり [行]と⑩大祓

(三)

⑪先帝祭= 昭和天皇祭 [大]、⑫紀元節祭 [臨時御拝]、⑬神武天皇祭 [大]、⑭孝明天皇例祭 [小]、⑮明治天皇例祭 [小]、⑯香淳皇后例祭 [小]、⑰大正天皇例祭 [小]、⑱天長祭、および⑲神武天皇と孝明・明治・大正各天皇と香淳皇后の式年祭 [大]、⑳それ以前の歴代天皇の式年祭 [小]、㉑代始め大礼関係祭祀、㉒皇族の人生儀礼関係祭祀、㉓春季の皇霊祭と神殿祭、㉔秋季の皇霊祭と神殿祭、㉕賢所御神楽 [小] など。

■靖国神社

祭神は、幕末から明治維新にかけて功のあった志士に始まり、1853年（嘉永6年）のペリー来航（所謂「黒船来航」）以降の日本の国内外の事変・戦争等、国事に殉じた軍人、軍属等の戦没者を「英霊」と称して祀り、その柱数（柱（はしら）は神を数える単位）は2004年（平成16年）10月17日現在で計 246万6532柱にも及ぶ。



戊辰戦争終戦後の1868年（慶応4年）旧暦6月2日に、東征大総督有栖川宮熾仁親王が戦没した官軍（朝廷方）将校の招魂祭を江戸城西丸広間において斎行したり、同年旧暦5月10日に太政官布告で京都東山（現京都市東山区）に戦死者を祀ることが命ぜられたり（現京都霊山護国神社）、同旧暦7月10・11の両日には京都の河東操錬場において神祇官による1853年（嘉永6年）以降の殉国者を慰霊する祭典が行われる等、幕末維新时期の戦没者を慰霊、顕彰する動きが活発になり、そのための施設である招魂社創立の動きも各地で起きた。それらを背景に大村益次郎が東京に招魂社を創建することを献策すると、明治天皇の勅許を受けて1869年（明治2年）旧暦6月12日に現社地での招魂社創建が決定され、同月29日（新暦8月6日）に五辻安仲が勅使として差遣され、時の軍務官知事仁和寺宮嘉彰親王を祭主に戊辰の戦没者3,588柱を合祀鎮祭、「東京招魂社」として創建された。ただし、創祀時は未だ仮神殿の状態であり、本殿が竣工したのは1872年（明治5年）であった。

1865年、長州藩が奇兵隊の死者を祀るために建立した桜山招魂社が、靖国神社の起源である。その後、禁門の変、戊辰戦争などで戦死した長州軍の兵を合祀。明治維新後、明治天皇の上京にともない、天皇の錦の御旗が与えられることで、官幣の神社として靖国神社が設立された。

以上の経緯を踏まえると、靖国神社は、明治維新以降、実権を握った長州閥の意向が色濃く反映された神社だと言える。事実、会津藩家老を先祖に持つ右翼の大物・田中清玄は、靖国神社を「長州藩の守り神にすぎないもの」と切り捨てたという。

東北地方は、仙台第二師団のガ島玉砕、第36師団（雪部隊）のニューギニア玉砕はじめ、戦没者の多い地域だが、「靖国神社に参拝すべきだ」とする意見には異を唱える人が多い。「朝敵は弔わず」、これは賊軍に対する明治政府の一貫した姿勢だった。東北(奥羽列藩同盟)の犠牲者をはじめ、彰義隊、西南の役の西郷隆盛側などは、靖国はもちろん、日本各地の招魂社（護国神社）にも祀ることはなかった。

そして、薩長中心による富国強兵政策の一貫としての軍事強化推進が、その後の日清・日露・大東亜戦争につながったと見るのが自然だし、靖国はその精神的支柱として存在した。今なお、“明治政府（官軍側）は素晴らしかったと絶対視”し、賊軍とされた地域のインフラ整備の後回しなど、東北蔑視政策が続くかぎり、多くの東北人が心から靖国神社を参拝する気持ちにはならないだろう。

そこには、薩長が天皇を人質同然にした当時の、「天皇陛下＝靖国神社だ。文句あるか」という、天皇の威光を利用するだけ利用した空気が流れている。それに比して、京都守護職を務めた会津藩主・松平保容は、孝明天皇から辰翰を賜り、正に官軍だった。明治26年12月5日松平保容公死後、辰翰の事実を知った明治政府は、この内容が公になれば、自分達が嘘で固めた歴史観が根底から覆えるとあわてた。

そして、明治政府は密かに大金で譲渡するように圧力をかけたが、会津藩・松平家はこれを頑強に拒否した。何度でも繰り返すが会津藩側が官軍、薩長土肥(明治政府)側が賊軍だったのだ。

それに薩長や岩倉具視らの戦略による錦旗の偽造や、孝明天皇の毒殺説も有力だ。これが薩長は「偽(にせ)官軍」と言われる理由であり、偽(にせ)官軍が天皇陛下の威光を利用するために作ったのが「靖国神社」という図式になる。

日本を再び戦争をする国家にさせようと企む人達にとっては「国のために命を捨てさせる」ための装置としてこの神社は象徴的な大きな意味をもつものなのでしょう。

<http://z-shibuya.cocolog-nifty.com/blog/2010/08/post-e1bb.html>

千代田区九段北3丁目1-1

●第二次世界大戦の最中、パールハーバー攻撃の前年に東郷神社は建てられている。

生前からあった神社創建の計画そのものは東郷は強く拒否していた。

(2016年12月)

(2026年2月再確認・修正)

竜天太陽 記